

国鉄民営化と鉄道愛好の変容

関西大学大学院 塩見 翔

1 目的

本報告の目的は、日本における「鉄道愛好」という文化の、1980年代から現在までの変容の一端を論ずることにある。鉄道愛好は1960年代から1970年代にかけて、鉄道趣味ブームや旅行ブームのなかで担い手を拡大してきた。しかし1987年の国鉄分割・民営化以降、鉄道の商品化、消費対象化の趨勢の中で、鉄道愛好もそのあり方を大きく変えてきた。本報告では「国鉄改革」とその後の変化の影響にもっとも敏感に反応した鉄道愛好者として、「社会派鉄道雑誌」の読者層に注目する。彼らが愛好対象である鉄道をいかに語ってきたのかを追うことで、国鉄分割・民営化が鉄道愛好に与えた影響を明らかにする。

2 方法

本研究では鉄道専門誌『鉄道ジャーナル』（1967年創刊、以下『ジャーナル』）のうち、国鉄再建・改革論議が盛んになった1980年代から現在にかけての読者欄を中心に、関連する記事、編集後記を含めて内容分析を行った。同誌は数誌ある月刊鉄道雑誌の中でも「社会派」と自らを位置づけてきた点に特色をもつ。また同誌の読者欄は「社会派」鉄道愛好者たちが「鉄道のあるべき姿」を論じる場として機能してきた。

3 結果

国鉄分割・民営化が大きな焦点となった1980年代には、『ジャーナル』誌上の主要な論点は「鉄道をいかに再生させるか」であった。同誌の編集方針、また読者欄への投稿内容においても、「総合交通体系の確立」という共通の理念のもとで、現代社会の中で鉄道が果たすべき役割が語られた。1990年代にはJR体制のもとでの「鉄道復権」が論点となっていくが、読者欄では前のめりの「鉄道復権論」への疑義を呈する投稿や、鉄道に対する個人的な心情を語る投稿が現れるなど、内容の多様化が見られた。2000年代以降は「鉄道のあるべき姿」に関する明確な理念が誌上で語られなくなるとともに、読者欄では90年代の傾向とは逆に多様性が減少し、鉄道事業者に対する定型的な要望や提案がほとんどを占めるようになる。

4 結論

1980年代の「社会派」鉄道愛好者たちにとって「鉄道のあるべき姿」とは、「社会の中で役に立つもの」であったといえる。「国鉄（≡鉄道）の危機」を認識した彼らは、『ジャーナル』誌が提示する理念を参照しつつ、鉄道が「社会の役に立つもの」としていかに再生するべきかを問う鉄道論議へと向かっていった。しかし、分割・民営化によって愛好者にとって共通の問題であった国鉄が消滅し、JRをはじめとする鉄道事業者による鉄道自体の商品化傾向が強まる中で、「社会の役に立つもの」であることは必ずしも鉄道や個々の列車の存在理由ではなくなっていく。こうした中で、1990年代には『ジャーナル』誌がかかげる「鉄道のあるべき姿」が相対化されていき、「社会派」愛好者による鉄道論議もより個人的な観点が強いものへと変化したと考えられる。2000年代半ばにはマスメディアで「鉄道ブーム」が喧伝され、鉄道の消費対象化がさらに進んでいったが、その延長線上にある現在においては、「社会派」鉄道愛好者が「鉄道のあるべき姿」を語る、ということがますます困難になっているといえよう。